様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２３９９

研究課題名（和文）多言語金石文資料の精査に基づくユーラシアの歴史と文明の国境横断的研究

研究課題名（英文）international surveys on the inscription sources in Eurasian countries

研究代表者
井谷　鋼造（Itani, Kozo）

京都大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：６０１４４３０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,350,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者はイスラーム時代の西アジア史研究者であり、アラビア文字の金石文資料研究の日本における開拓者、第一人者であり、今回の基盤研究においても外国での現地調査を4回の現地調査を行ない、多くの研究素材を入手して西アジア、特にトルコ、イラン、アゼルバイジャンにおけるイスラーム時代の国家、社会、文化の歴史を的確に理解するための重要な研究成果を得た。研究成果の約半分は2021年3月に完成し、国内の主要な研究者に配布した『研究成果報告書Ｉ』に発表している。
研究分担者も各自、中央アジア、ソグド文化及びインドの宗教文化、文学について重要な研究成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究代表者は最終年度である2019年11月2日に史学研究会において公開講演会を行ない、研究者のみならず、一般の聴衆にも本研究成果の一端を紹介した。今後も本研究の結果得られた研究成果は、研究代表者の個人的な著作において研究成果として活用され、日本及び世界のイスラーム史、西アジア史研究に大きな貢献をすることが期待される。本研究のような国境横断的な現地調査を中心とする金石文資料研究はこれまでにも行なわれたことがなく、本研究の研究史的な意義は甚だ大きいものである。

研究成果の概要（英文）：International surveys on the inscription sources in Eurasian countries lasted from 2017 to 2020. The chief member of this project visited Azerbaijan, Turkey and Iran 4times during the above-mentioned period. Many interesting ,important, historical inscriptional materials were collected by him who introduced some of them in his own report on the Arabic inscriptions in Azerbaijan, Turkey and Iran, published in May, 2021 with a lot of clear photographs taken by the author. This is a very important and valuable work on the Arabic inscriptions in those three countries. Till now there is no such example of inscriptional research beyond the borders in West Asia of Islamic periods.

研究分野：イスラーム時代西アジア史

キーワード：ユーラシア地域　金石文研究　西アジア　アラビア文字　イラン　トルコ　アゼルバイジャン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ユーラシアの各地には古代以来多くの金石文資料が残されてきており、それらはパピルスや羊皮紙、紙が文字資料を伝存する主要な媒体となるはるか以前から存在し、紙などの媒体が多く使用されるようになってから以降も現代に至るまで金石文資料が使用されなくなる時代はなかった。人類の文明史上、金石文資料は紙上などの文字記録よりも比較的に長い生命を保ち、歴史・文化上の貴重な文字記録を伝えてきた。古代エジプト、古代オリエント、古代ギリシア・ローマ、中国では多くの金石文資料が伝世品、発掘品ともに重要な研究資料となり、考古学的な発掘に当たっても遺物の年代決定の基準として金石文資料の果たす役割は甚だ大きい。パリのルーヴル博物館に所蔵される紀元前 18 世紀のハンムラビ王碑文は世界的に有名な遺品であるが、この碑文が 20 世紀初頭イランのスーサ遺跡で発見され、時間をおかずに解読されたことは古代バビロニアの歴史を解明する上で計り知れないほどの貢献となった。このような例は世界各地で見られ、伝世品に加えて多くの新たに発掘された金石文資料の解読が人類の文明史研究の発展に寄与してきたのである。

日本史、西洋史、東洋史の各分野で各地の金石文資料は長期にわたって研究者の関心を集め、専門の研究者も少なくないのであるが、西アジア、中央アジア地域のイスラーム時代のアラビア文字金石文資料については特に日本の歴史学界に専門研究者がいないのである。本基盤研究（B)の研究代表者、井谷鋼造（研究開始時は京都大学文学研究科教授）は 1997 年以来、中央アジア、西アジア地域のイスラーム時代アラビア文字金石文資料の研究を続け、この分野では第一人者と言うのも過言ではなく、着実な研究実績を有しており、現地調査の経験も豊富である。アラビア文字で書き残されたアラビア語、ペルシア語、テュルク（トルコ）語の刻銘文資料はどれも解読可能であり、刻銘文資料のみならず、図書館などに所蔵されるアラビア文字の手稿本（写本）資料についても充分な解読能力を備えている。このような能力と経験を有する研究者は西アジアの現地各国でも存在せず、特筆すべき学識と能力を持つ研究者が研究代表者となっていたのである。本研究を開始するまで研究代表者が実施した現地調査の国別回数は次の通りである。トルコ共和国 15 回（1998～2014 年）、イラン・イスラーム共和国 3 回（2013, 14, 17 年）、ギリシア共和国 2 回（2004, 06 年）、シリア・アラブ共和国 1 回（2006 年）、ウズベキスタン共和国 1 回（2002 年）、カザクスタン共和国 1 回（2003 年）。

本基盤研究（B）の開始前に研究代表者、井谷は平成 24～26 年度科研費・基盤研究（C）（研究課題名は「アラビア文字碑刻銘文資料の精査に基づく西アジア史の研究」課題番号：24520802）によって単独でイラン、トルコの各地で現地調査を行ない、その成果は 2015 年 3 月に紙媒体で印刷し、国内外の主要な研究者に配布した。（A5 版、全 137 頁）

こうした研究代表者のこれまでの堅実な研究実績をさらに充実・増加させ、周囲の卓越した研究者らの協力を得ることにより本研究の開始に至るまでには、さらに広範な領域と時代をカヴァー出来るユーラシア各地の金石文資料研究の構想を実現できる環境が整いつつあった。研究代表者は本研究の開始に先立ち、2016 年 9 月に公益財団法人である三菱財団より平成 28 年度研究助成金を受領しており、この助成を利用して 2017 年 3 月には本基盤研究（B）の連携研究者に予定していた杉山雅樹氏（イラン史研究者）とともにイランでの金石文資料の現地調査を行なった。この年にアメリカ合衆国大統領に就任した D.トランプ氏の対イラン強硬外交の開始により、以降はイランでの研究活動が容易でなくなったため、このタイミングで現地調査が出来たことは幸運であった。また、この三菱財団研究助成の課題である「トルコ・イラン・アゼルバイジャン 3 国におけるアラビア文字碑刻銘文資料の国境横断的調査と研究」は本基盤研究（B）の研究課題と共有する部分が多く、本研究代表者の下では相互に一体のものであるとの認識を持ちながら研究を遂行した。

研究代表者及び研究分担者は全て豊富な研究と教育経験を有する京都大学文学研究科の専任教員であり、平成 30 年度末まで存続した京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（平成 31 年度より改称）のセンター長および　運営委員を併任しており、協同して研究を行なう条件が充分に存在した。

２．研究の目的

上記の背景でも述べたごとく、長い伝統を有する人文科学の基本的な研究姿勢は徹底した文献研究であり、その対象とする研究素材を精選して原典資料に取り組むことが最重要課題であることは言うまでもない。金石文資料はその基本的な性格として石材や金属器、木製品などの素材にひとたび銘文として刻入されるや修正、補足が極めて困難であり、文字記録としての真

正性の面で修正や補足さらには改竄すらも不可能ではない紙上に残された記録を遙かに凌駕している。刻銘文資料の伝える情報量は多くないが、虚偽や改竄の介在することが困難な、それだけで独立した貴重な文字情報を遺しているのである。

研究代表者が専門とするイスラーム時代のアラビア文字による金石文資料研究についても西アジアのトルコ、イラン、シリア、アゼルバイジャン、中央アジアのウズベキスタン、カザクスタンなどの各国ではロシアを含むヨーロッパの研究者や彼らに触発された現地人研究者による、それぞれ 100 年を超える研究蓄積があり、それらを収集して検討し、歴史や文化の研究に利用することは重要である。しかし、研究代表者の経験及び見解によれば、上記の諸国でも自国の国境外の金石文資料については研究状況も把握しておらず、国境を挟んで近接した地域でも情報は相互に流通していない現状がある。例えば、トルコとイランは東西に位置する隣国として南北に長い国境を接し、国境地帯にはクルド人を主体とする様々な民族的マイノリティが居住して国境が画定された現状においても歴史的、文化的に密接な関係が結ばれているが、その歴史的な関連のエヴィデンスとなる国境を挟んだ地域に存在する刻銘文資料の比較研究などは全く行なわれていないのである。

この状況はイランと南北に位置する隣国であるアゼルバイジャンとの間にも当てはまる。アゼルバイジャンは 19 世紀前半に帝政ロシアの南東カフカース進出に伴い、ロシアの支配下に置かれたが、それ以前はイランの文化的、政治的な影響を強く受け、イラン北西部のアーザルバイジャーン地域とアラス河以北の現アゼルバイジャン共和国とは民族的、言語的、文化的な紐帯が強い。しかし、この両地域の場合も刻銘文資料の共通性などはこれまで研究対象にはならず、あたかも政治的にはそれぞれが独立した地域であったかのごとくに見なされることすらあったのであるが、これは歴史的に見て正当な見解とは言えない。

本研究はユーラシア各国で行なわれてきた金石文資料研究を基本としながらも、さらに進んで国境横断的な研究を行ない、19 世紀以降の近代において確定されたに過ぎないユーラシア地域の現国境を横断して歴史的、文化的に共有されるべき金石文資料の実地調査と解読、研究を目的とした。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するために、上記の背景で述べたように、これまでの研究成果を基盤として、その成果をさらに質的に充実させ、量的には増大させるための研究を行なった。具体的には、イラン、トルコ、アゼルバイジャンの 3 国でこれまで蓄積されてきた既存の金石文資料研究を収集、検討し、それらの成果を踏まえた上で上記 3 国での金石文資料の実地調査を行なった。イランやトルコにおける既存の研究は研究代表者が概ねそれらを把握し、特にトルコについてはこれまでの調査や研究の結果として主要な情報を入手していたが、アゼルバイジャンについては既存の研究についての情報が乏しく、現地調査の日程や対象を決める上で困難が予想されたが、本研究を遂行する過程で重要な先行研究を収集することが出来た。この件に関しては連携研究者である塩野﨑信也氏（アゼルバイジャン史研究者、龍谷大学文学部・専任講師）の協力があって実現した。具体的にアゼルバイジャンにおけるアラビア文字金石文資料の先行研究者を挙げると、1960 年代から国内の金石文資料、特に墓碑銘や石造銘文について網羅的な研究を精力的に行ない、成果を発表してきたメシェディーハヌム・ネイマト氏がおり、彼女がこれまで刊行してきた研究書 6 冊（ロシア語及びアゼルバイジャン語）を入手でき、調査と研究に利用することが出来た。

2017 年 9 月には第 1 回のアゼルバイジャン・トルコ両国における現地調査を行なった。この調査で研究代表者は前年に得ていた平成 28 年度三菱財団研究助成金を使用して研究を行ない、同行した連携研究者、塩野﨑信也氏及び今松泰氏（オスマーン朝史研究者）は本基盤研究（B）より旅費を支給した。アゼルバイジャンからトルコへは陸路国境越えして入国し、隣接するいずれもテュルク系住民を主体とする国家でありながら、文化的・歴史的背景を異にする両国の現状を具に体験することが出来、バクーからイスタンブルまで長距離の調査を行なった。

2018 年 8－9 月は 8 月に前期の今松泰氏とトルコでの現地調査を行なった後、研究代表者はアゼルバイジャンに移動し、バクーで塩野﨑信也氏と落ち合い、前年の調査の補足を行なった。

2019 年 3 月には当時現地に滞在中であった研究協力者、岩本佳子氏（オスマーン朝史研究者、現在は長崎大学多文化社会学部・准教授）と同行し、これまで未調査であったトルコ共和国東南部で現地調査を行なった。

2019 年 9 月にはアゼルバイジャンで連携研究者、塩野﨑信也氏、及び杉山雅樹氏とともにアゼルバイジャン、ジョージア両国で調査を行なった後、研究代表者は単独でトルコへ入国し、トルコでの調査を行なった。この調査には研究協力者の Mehmet Ekiz 氏（Niğde 大学教授）の研究協力を受けた。

現地に渡航した際には現地の研究者との情報交換を行ない、また既存の解読や研究がある金石文資料についても必要に応じて再調査や再検討を行なった。これまで収集した金石文資料の写真は多量であるが、それらは順次解読し、内容を紹介し、ユーラシアの歴史や文化に関わる重要な資料については研究論文として発表している。

４．研究成果

研究代表者は 2020 年 3 月に京都大学を定年退職したが、引き続き研究を続け、2021 年 3 月に『研究成果報告書□』を紙媒体（100 部、B5 版、全 144 頁）で刊行し、うち 77 部を国内の主要な研究者に配布した。この研究成果報告書は本基盤研究（B)の他に平成 28 年度の三菱財団研究助成による研究成果を一体として収録し、特に 2017 年 3 月のイラン、2017～2019 年に 3 回実施したアゼルバイジャンでの実地調査の研究成果を提示するもので、貴重で、重要な研究成果となっている。研究代表者は引き続き 2017～2019 年に 4 回現地調査を行なったトルコ共和国での研究成果の発表を準備しており、2021 年度中の刊行を目指している。

なお、この研究報告書では、本研究を通じて収集し、加えてこれまで研究代表者が長年にわたって収集してきた大量の金石文資料の写真資料を掲載したため、各国の博物館等での所蔵品写真等の掲載許可が必要となり、煩雑な手続きを求められることが予想されたため、敢えて公的な出版物とせず、私的な研究刊行物をすることにした。いずれ、正式な掲載許可手続きを経た上で研究資料集として公開・刊行することを望んでいる。

＊刻銘文資料の一例、アゼルバイジャン共和国、バクー市、金曜マスジド所在の石板銘文
14 世紀、イールハーン朝支配時代（アラビア文字テクストの翻刻、日本語訳、解説は上記研究成果報告書Ｉ、100-101 頁参照）

＊アゼルバイジャン共和国、グサル市郊外ヘズレ村所在のシャイフ・ジュナイド廟の石板銘文、1544/5 年、サファヴィー朝時代（上記研究報告書Ｉ、19-20 頁参照）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 吉田豊	４．発行年 2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 278
３．書名 Three Manichaean Sogdian Letters unearthed in Bezeklik, Turfan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　豊 (Yoshida Yutaka) (30191620)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	横地　優子 (Yokochi Yuko) (30230650)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	吉田　和彦 (Yoshida Kazuhiko) (90183699)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関